

フロースン・ロマンス

鈴木優花

喫煙所を探して歩いていた。

二十四歳の、ある晴れた日の午後。

繁華街の雑踏を抜けて見えたのは、流行りのカフェ。高校生くらいの女の子が二人、ホイップクリームとフルーツが山盛りのパンケーキにカメラを向けていた。ぴったり並んで座っている、あどけない笑顔。

あの頃、同じ空間にただで満足する片思いをしていた私は、清楚気取りを目の敵にしていた。当たり前のように、恋に落ちた相手と並んで歩く背中が妬ましくて。笑顔とは無縁だった。

個性派を狙って前髪を斜めにカットした。「かわいい」の土俵に立っていないから、私をその物差しで評価しないで、と。

口には出せなかった。

誰にも教えていなかった。

好きなあの子と二人きり、授業を抜け出した。

人通りの少ない緩やかな坂道、二人乗りの自転車で風になった。駅前のコンビニのイートインで、文化祭の動画を横並びで眺めた。スマホに繋いだ有線イヤホンの左右を二人で分けて、頭を寄せ合った。近くに感じる体温と息遣いが私だけのものになったような気がした。

友達だから変じゃないよねって自分に言い聞かせて、あの子の手を引いた時、熱を持った頬。十分すぎるくらいドキドキした。

眩しいくらいの青い芽が、無意識のままに大きく育っていた。すべて一つずつ丁寧に、汚れないように、私だけのアルバムに仕舞った。

そして心に閉じ込めた。

誰に語ることもないまま、温度を失ってしまった。

いつかの日に溶かしてまた、味わってみたい。あの瑞々しさと、甘酸っぱさを。私はもう、お洒落なパンケーキなんて一枚食べるのだって精一杯だけど。